様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １４ 日現在

機関番号：３３１０４
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2019
課題番号：１８Ｋ１２４３９

研究課題名（和文）第二言語における節連接の習得とその明示的指導による外国語教育への応用

研究課題名（英文）Second language acquisition of clause combining and its explicit grammatical instruction applied to foreign language education

研究代表者
主濱　祐二（Shuhama, Yuji）

敬和学園大学・人文学部・准教授

研究者番号：２０５４７７１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　800,000円

研究成果の概要（和文）：系統の離れた言語では、単文の構造に加え、節連接の方法も異なることが多い。その違いを母語と対照させた明示的な指導により、複合的な命題をより端的に外国語で表現できると予測し本研究を計画した。まず日本語と英語の複文の構造を生成文法の枠組みで比較し、日本語を母語とする英語学習者の誤り傾向を観察した。続いて、英語の複文の明示的文法指導を伴う複数回の授業を実施し、事前・事後テストのデータの比較から普遍文法を仮定するモデルに沿って複文の習得が促されるか検証した。測定結果から、明示的指導は英語の節連接の語順の習得を促したと言える。ただし、習熟度が低い場合、指導の効果は限定的であることも確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
言語系統が異なる英語と日本語の第２言語文法の習得に普遍文法と母語知識がどの程度関与するかを明らかにすることで、文法研究を普段の学習指導で利用可能な教授法や教材に応用できる可能性が開ける。節連接については、従属接続詞を難しく感じる生徒が多いため、大学を含む高校以降の英語の使用場面である話題について表現する際に、単文を超えた談話レベルでの伝達が極めて難しいようである。母語と外国語の節連接の違いを第２言語習得に生かすことで、このような実際の言語習得上の課題に理論言語学の立場から解決策を提示し貢献することができる。

研究成果の概要（英文）：Typologically distant languages often contrast in the manner of clause linkage as well as the structure of simple sentences. This study was planned to expect that that complex propositions can be expressed precisely in a foreign language if the contrast is explicitly taught between learners' native language (L1) and the target/second language (L2). First, the structural difference of subordinate clauses in Japanese and English was analyzed in the framework of generative grammar, and the error tendency of English temporal clauses was observed using JEFLL Corpus. Next, several experimental classes were conducted for explicit grammar instruction of clause linkage focusing on relative clauses, and the data of Pre-test and Post-test was analyzed to see how the acquisition was promoted. The results show that the explicit grammar instruction promoted the acquisition of the word order of English clause linkage, but its effect was restricted according to the learners' L2 proficiency.

研究分野：英語学

キーワード：節連接　第２言語習得　明示的指導　普遍文法　関係節

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

文法指導は、外国語教育の重要な役割の一つである。日本で外国語教育（本研究では英語教育）が公式に実施される学齢期は、母語（first language: L1）の形成が完了し成熟する時期でもあるが、それ以降の教室内第２言語習得（classroom second language (L2) acquisition）では教師が文法事項を解説し、練習問題や添削により定着を促す場面がよくある。このような明示的文法指導（explicit grammar instruction）は教室で広く実践される教授法ではあるものの、それが L2 の文法習得を促す効果は、文法項目や学習者の習熟度により一様ではない。例えば日本語話者が英語を学ぶ場合（L1：日本語、L2：英語）、語順や be 動詞の語形変化に比べ、三人称単数現在形の-s や現在完了形などは習得が困難なようである（白畑 2015, 2018）。なぜ文法項目の説明や誤りの指摘を繰り返しても容易に修正が促されないことがあるのか、L2 文法習得研究の観点から説明する余地がある。

明示的文法指導は決して目新しい教授法ではなく、むしろ昨今のコミュニケーション重視の方向性に逆行するアプローチであると批判されるかもしれない。しかし、この方法が教室内 L2 文法習得に十分有効であり、かつ適切に機能しうることは、[1]に一部挙げる L2 文法習得の特性からも支持される。

[1]　①　L1 からの転移（正の転移と負の転移）が起こる。
　　②　L1 の背景や L2 習得の環境が異なる場合でも、一定の順序に沿い習得が進む。
　　③　成人の場合、L1 を用いて自分の考えを言語化できるほど認知能力や分析能力が高い。

L2 文法は共通の発達段階を辿ることが観察されており、L1 による干渉はある発達段階に留まる程度や期間に影響する（[1-①, ②], Pienemann 1989）。そこで、負の転移による停滞を緩和するのが「L1 の利用」の可能性である（[1-③]）。こどもと比べ、母語が形成された成人学習者は、L1 に照らして L2 を分析的に捉え、短期間に効率よく L2 文法を習得できることが知られている。

日本語（L1）による負の転移が習得に影響を及ぼすと思われる英語（L2）の文法項目のうち、本研究では節連接に注目した。節連接（clause linkage）とは、複文における２つ以上の節の接続のことであるが（角田 2012）、when や because などの基本的な接続詞を用いた英語の節連接であっても、日本語が L1 の学習者には多少習得が難しい文法知識である可能性が高い。そう推測する理由は、日本語では接続助詞「～（し）て」などを用いて節を並置させるのが自然であるのに対し、英語では複数の節を主従関係に置く傾向があるからである（福地 2012）。この節連接の違いを図示すると、[2]のようになる。

[2]　①　［　節　］（て）＋［　節　］　〈L1：日本語〉
　　②　［　主　節　［　従属節　］　］　〈L2：英　語〉

節連接については、申請者のこれまでの指導経験や、様々な校種の授業見学や聞き取りから得られた気づきとして、現行では中学校 2 年生段階で導入されている when, if, because 等の「従属接続詞」を難しいと感じている生徒が多く、定着度も低いという問題意識があった。そのため、大学生も例外ではなく、高校以降の英語学習（利用）場面である話題や出来事について表現する際に、節とはどんなまとまりで（主語・定形動詞を含む単位）、そのどこに接続詞を置くのかという節の接続に関する文法に習熟していないため、単文を超えた談話レベルでの伝達が極めて難しい。このような気づきから、「L1 と L2 の節連接の違いを第２言語習得に生かす」という本研究の着想に至った。

２．研究の目的

系統の離れた言語では、単文の構造に加え、節連接の方法も異なることが多い。その違いを学習者の母語（L1）と対照させ明示的に指導すれば、複合的な命題をより端的に外国語（L2）で表現できるであろうという予測のもと、本研究に着手した。研究開始時の目的は、[3]に挙げる２つであった。

[3]　①　日本語と英語の文・節の基本構造と、複数の文・節の繋ぎ方　（節連接）の対照言語学的分析を手掛かりに、第２言語習得における節連接の習得の仕組みを明らかにする。
　　②　①の知見をもとに初中級向けの英語・日本語文法学習に活用できる教材を開発する。

本研究は、言語系統が異なる英語と日本語の第２言語文法の習得に普遍文法と母語知識がどの程度関与するかを示唆し（[3-①]）、また、文法研究を実際の学習指導で利用可能な教材に応用しその成果を検証する（[3-②]）ことで、理論言語学の外国語教育への応用・貢献を図ることを当初の狙いとした。申請者の異動の影響や研究期間の制約により、当初予定していた[3-②]の教材化は 2020 年度より開始の継続科研課題に引き継ぐことにし、実際は[3-①]に関する研究が中心となった。

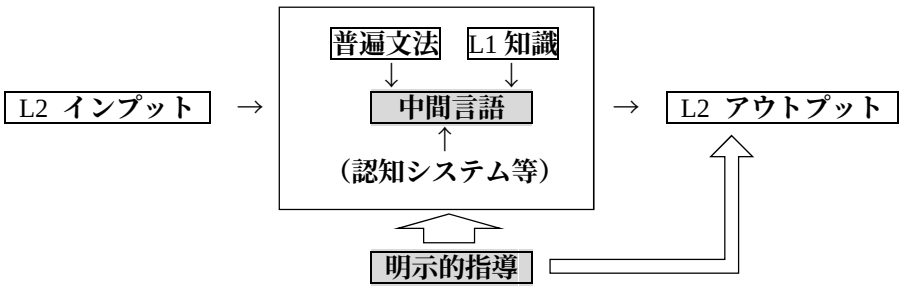
[3-①]に挙げた第２言語習得における節連接の習得の仕組みの解明の方向性として、[4]に示す２つの問いを設定した。

[4] ① 第２言語としての英語の節連接は、どのように習得されるか。
② 英語の節連接習得の明示的指導は、複文の習得を促進するか。

[4-①]に答えるためには、まず日本語（L1）と英語（L2）の複文が構造的にどのように異なるか調べなければならない。すでに[2]で見た基本的な相違を踏まえ、角田(2009, 2012)に代表される対照言語学からの知見や生成文法に基づく統語分析を手がかりに、習得される複文（節連接）の文法知識を特定する。第２言語の文法に共通の発達過程に照らし、その知識のどこがどの程度習得されているか、またそこに L1 の干渉が見られるか、収集したデータから推定が可能である。

[4-②]に対する答えは、[4-①]で得られた知見に基づく明示的指導を実際に行うことで導き出せる。本研究における明示的指導は、白畑(2015)の手法を参考にし、L1 と L2 で対応のある文法（構文）の対比を意識させる説明と、誤りを指摘し正確な形を示す修正フィードバックを含む。[5]に示す L2 文法習得モデルでは、明示的指導は L2 インプットを普遍文法や L1 の文法知識に即して中間言語の文法を構築する精度を高め、L2 アウトプットの誤り訂正により正しい L2 文法への気付きを促す役割を担う。

[5] 第２言語の文法習得モデル（白畑 2015 に基づく）



本研究における接連接の明示的指導の効果測定により、[5]のモデルの妥当性が検証されるとともに、学習者の習熟度など L2 文法習得に関わる要因の特定にもつながる見込みがある。

３．研究の方法

本研究は 2018 年度から 2019 年度までの 2 年間で実施した。2018 年度は日本語と英語の複文（従属節を含む文）の構造を生成文法の枠組みで比較し、日本語を母語とする英語学習者の誤り傾向を観察した。続く 2019 年度は、英語の複文の明示的文法指導を伴う複数回の実験授業を実施し、事前・事後調査のデータの比較から普遍文法を仮定する第２言語習得モデルに沿って複文の習得が促されるか検証した。

各年度の具体的な実施内容は[6]、[7]の通りである。

[6] 2018 年度
① 英語習得の初期に学ばれる if, when, because, that などの従属節を形成する基本的な接続詞のうち、when を用いた副詞節を取り上げ、日本語で対応する「～と」「～とき」節との比較を通して、その統語的性質を生成文法の枠組みで特定する。
② 学習者コーパス（JEFLL、投野 2007）から when を用いた副詞節のデータを抽出し、学習段階（経過期間の長さ）と副詞節の正確さ（誤りの種類やその割合）との相関を調査する。

[7] 2019 年度
① when を用いた副詞節と構造的な類似性の高い、who や which などに導かれる関係節についても[6-①]と同様に調査する。
② [7-①]を踏まえ、関係節の L2 文法習得を促す明示的文法指導を計画・実施し、事前・事後調査の結果から、その習得上の効果、習熟度による影響、そして[5]のモデルの妥当性を検証する。

明示的指導の教材には、*English Grammar in Use* (R. Murphy, 2019, 5th ed.)を用い、Relative Clauses (Unit 92-96)の範囲を 60 分ずつ３回（３週）に分け連続で指導した。[8]に例示するような日英語比較に基づいて説明し、残り時間は付属の練習問題で理解度の確認と誤答の訂正を行った。

[8] ① 私は 女性に 会いたかった。

| 私が 会いたかった 女性 | は休暇でいなかった。

② I wanted to see the woman

| The woman who I wanted to see | was away on holiday.

４．研究成果

(1) パラメータと節連接

Murasugi (2000)の仮説では、関係節パラメータの無標値は普遍的に CP であり、幼児の発話（例 [$_{CP}$ 怪獣の食べたの] ゴリラ）に観察されるように日本語でも CP から始まるが、L1（日本語）の獲得過程で TP に設定される。文献調査から when を用いた副詞節は（自由）関係節と統語的に著しく類似していることが分かり、統語的には形式素性の認可が必要な機能範疇 C（complementizer, 補文標識）をもつ構造であると分析できる。従って、L1 では C を欠く（多用しない）が、L2 の対応する構文では C の投射を新たに設ける必要があり、普遍文法を仮定する L2 文法習得の観点からも（Failed Functional Features Hypothesis (Hawkins & Chan, 1997)）本研究で着目した複文形成は習得が困難な文法項目であることが正しく予測される。

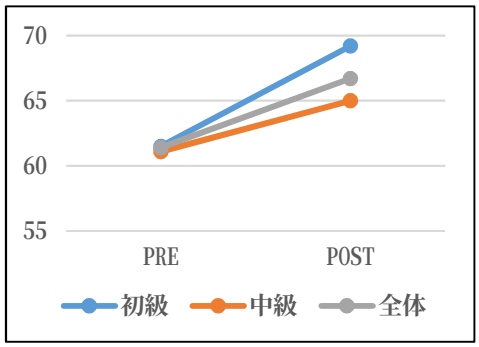
(2) L2 接連接の発達段階

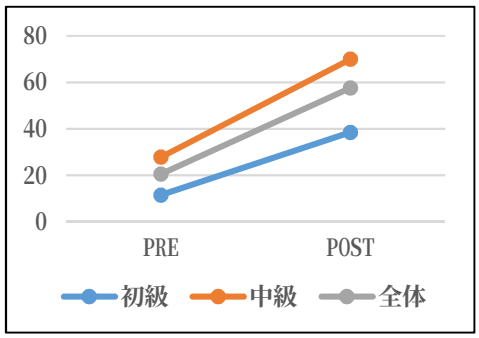
節連接に関する初期の L2 文法の発達を観察するため、JEFLL コーパスから中学２年生と高校２年生のライティングに現れる when 節のデータを抽出し分析した。Vainikka & Young-Scholten (2007, 2011)の L1・L2 共通の発達段階に沿った傾向が見られ、習得初期の中学生は L1 の負の転移が顕著で節要素を従える when の特性が未分析である（VP-FP-IP 段階）のに対し、３年ほど学習を経た高校生では語順や接続詞の範疇についての負の転移は起こりにくく、when が節要素を従えることができている（FP-IP-CP 段階）。しかし、when が連結する節内の動詞の形態のエラーには明確な減少が確認できなかった。CP 段階に至っている学習者でも広く誤りが見られるため、C を介して連結される節の T（tense, 時制）の素性に関して、L1 の干渉により L2 知識の習得が停滞していると推察される。

(3) 明示的指導の効果

接連接の一種で、when による副詞節と構造的に類似し、かつより複雑な知識を要する、who などが導く関係節を取り上げ、明示的指導の効果を検証した。Oxford Online Placement Test で初級と中級に分けられた日本語を母語とする大学生 88 名を対象に[8]で例示した指導を実施し、その前後でテストを行った。

右側上のグラフは、適切な関係詞の判断（例 I know a shop (　) sells good meat.）、右側下のグラフは関係詞を含む語順（例 Many people [that live in Mexico speak Spanish].）に関する問題群それぞれの正答率を示している。関係節判断の正答率は微増したものの、統計的に有意な増加ではなく、習熟度による差もほとんど見られなかった。対照的に、語順の正答率は統計的に有意な増加を示し、特に中級で顕著であった。初級では *The person [spoke to somebody whom] wasn't very helpful.のように「主語＋動詞」を先行させる例が散見された。





事前・事後テストの結果から、[5]のモデルに基づく明示的指導は L2 の節連接（関係節）の語順の習得を促したと言える。ただし、先行研究と同様習熟度が低いと十分な効果が得られないことも確認され、また、関係詞の判断に必要な格や項構造の知識の習得には至らなかった。

(4) 今後の課題（2020 年度以降）

動詞屈折（-s や-ed など）の誤りは主節より従属節で顕著であると思われる。データを収集し誤りを誘発する要因を統語的観点から特定できれば、動詞形態や節構造の習得を促すより詳細な指導上の提案が可能となる。従来動詞屈折は L2 の文法（形態統語）知識の解明のために単文レベルで分析されてきたが、本研究では複文レベルで分析し、かつ「ボトルネック仮説」（Slabakova 2016）等、第２言語の文法習得において活発な議論が行われている理論的枠組みの検証に利用することで、第２言語の文法と意味のインターフェースの解明を目指す。

〈主要参考文献〉

白畑知彦 2015 『英語指導における効果的な誤り訂正――第二言語習得研究の見地から』大修館書店

角田太作 2012「節連接の五段階」国語研プロジェクトレビュー No. 7, 13-21.

福地肇 2012「英文法と英作文」大津由紀雄（編）『学習英文法を見直したい』217-230、研究社

Slabakova, Roumyana. 2016. *Second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.

Vainikka, Anne and Martha Young-Scholten. 2011. *The acquisition of German: Introducing organic grammar*. Berlin: De Gruyter.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 主濱祐二	４．巻 10
２．論文標題 「時のwhen節」の統語構造：自由関係節との比較から	５．発行年 2019年
３．雑誌名 言語の普遍性と個別性	６．最初と最後の頁 51-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuji Shuhama	４．巻 29
２．論文標題 The stagelike development of temporal adverbial clauses in L2 English: an Organic Grammar perspective	５．発行年 2020年
３．雑誌名 敬和学園大学研究紀要	６．最初と最後の頁 101-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://www.keiwa-c.ac.jp/thesis/2020/02/28/57387.html	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 主濱祐二	４．巻 11
２．論文標題 英語学習者の関係節の文法知識に関する調査報告	５．発行年 2020年
３．雑誌名 言語の普遍性と個別性	６．最初と最後の頁 113-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Yuji Shuhama
２．発表標題 English adverbial clauses in generative SLA and their pedagogical implications
３．学会等名 Summer School: Linguistic Theory in Second and Foreign Language Teaching（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hiroto Kumakura and Yuji Shuhama
２．発表標題 Voice Mismatch between English and Japanese in SLA
３．学会等名 TULCON 12: Toronto Undergraduate Linguistics Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuji Shuhama
２．発表標題 An Organic Grammar Approach to Temporal When-clause Combining in Instructed SLA
３．学会等名 18th International Conference on Teaching, Education and Learning（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yoshikatsu Hasegawa and Yuji Shuhama
２．発表標題 Referential strategies of personal pronouns in learner English
３．学会等名 BUSCTEL 20: Bogazici University Student Conference on Theoretical and Experimental Linguistics（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考